



Terima kasih! Dusun Bina basa (ありがとう! ビナバサ村)



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
財団法人 鹿児島県国際交流協会

はじめに



鹿児島県青少年国際協力体験事業
実行委員会 会長

弓場 秋信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成2年度にマレーシアに派遣以来19回を迎えました。青少年を開発途上国に派遣し「国づくり、人づくりに貢献している」青年海外協力隊員の活動現場訪問で国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイでの異文化体験や学校等での交流を通じて国際性豊かな青少年を育成することを目的に、青年海外協力隊鹿児島県OB会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、財団法人鹿児島県国際交流協会の3者で構成された実行委員会で実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオスの5ヶ国に県下一円から今回の13名を含む220名の中高生を派遣しました。

今回15年ぶりにインドネシアに中高生を派遣することに決したのは、ASEAN（東南アジア諸国連合）10カ国の中で最大の国土と人口を有し、一時の政情不安が改善され、安定した政権下で開発途上国からの離陸が見えてきたようです。そして日本最大の援助供与国としてJICAによる無償資金協力、青年海外協力隊などの技術協力が成果を上げています。また、経済面においても日本の貿易相手国として重要なパートナーであるインドネシアを見てほしい、そんな思いからです。

インドネシアは、東西5,110kmと非常に長く、主な5つの島を含めた約17,000以上の島から成り立つ世界最大の島嶼国家です。面積は日本の約5倍189万平方キロに約2億2千8百万人もの人々が暮らし、約490の民族集団がそれぞれの多様な文化・言語を継承しています。また、人口の87%はイスラム教で、キリスト教は11%、仏教は1%、ヒンドゥー教は1%未満。世界最大のイスラム教徒国家です。まさに「多様性の中の統一人口国家」と言われる所以であります。

鹿児島市・鹿屋市・霧島市・南九州市・南さつま市推薦の10名と企業の協賛を得ての実行委員会推薦3名は、2回の事前研修でインドネシア語、インドネシア事情、青年海外協力隊等の国際協力、日本・鹿児島について学び、期待に胸を膨らまし平成22年8月1日、7泊8日の日程でインドネシアへ向けて出発しました。

団員は、国際協力機構JICAインドネシア事務所及びマカッサル事務所を訪問後、スラウェシ島南スラウェシ州の田園が広がるビナバサ村で4泊のホームステイに臨みました。言葉・生活環境・文化・価値観が異なる村での滞在中に、地元中学校での空手、書道、茶道、歌、折り紙などの日本文化紹介、そして農業、保健師、青少年活動の職種で活動する青年海外協力隊員の活動現場を訪問し体験、毎日が新鮮な出会い・気付きの連続で自分を見つめる時間となりました。団員一人一人の体験を通しての感想が綴られた報告書「Terima kasih! Dusun Bina basa (ありがとう! ビナバサ村)」が同世代をはじめ多くの皆様の心に届くことを希望しここにお届け致します。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、国際協力機構JICA九州、JICAインドネシア事務所及びマカッサル事務所、ビナバサ村、活動中青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げます。今後とも本事業へのご支援を賜りませう様お願い申し上げます。

第19回（平成22年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 主催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
(財)鹿児島県国際交流協会

- 2 共催 鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，霧島市国際交流協会，
南九州市教育委員会，南さつま国際交流推進協議会

- 3 後援 鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構九州国際センター

- 4 協賛 (株)鹿児島銀行
鹿児島空港ビルディング(株)
鹿児島トヨタ自動車(株)
鹿児島ヨコハマタイヤ(株)
小正醸造(株)
薩摩酒造(株)
(株)下堂園
太陽運輸倉庫(株)
南国殖産(株)
(株)山形屋
弓場貿易(株)

- 5 事業の流れ 4月～5月 募集・団員決定
6月12日(土) 第1回事前研修
7月3日(土)～4日(日) 第2回事前研修
8月1日(日) 出発
8月8日(日) 帰国
8月12日(木) 表敬訪問
8月21日(土) 報告会
9～10月 報告書作成

参加団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	推薦市町等
1	岩川 朋之	男	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	2	鹿児島市
2	八木 真理奈	女	鹿児島県立甲南高等学校	2	鹿児島市
3	入佐 彩加	女	鹿児島市立甲東中学校	1	鹿児島市
4	久保 健太	男	鹿児島県立鹿屋高等学校	1	鹿屋市
5	木藤 友香	女	鹿屋市立大始良中学校	1	鹿屋市
6	村上 将太郎	男	霧島市立陵南中学校	1	霧島市
7	川口 みなみ	女	学校法人池田学園池田高等学校	1	霧島市
8	奈良迫 ひかる	女	鹿児島県立松陽高等学校	3	南九州市
9	福永 梨々子	女	学校法人希望が丘学園鳳凰高等学校	2	南九州市
10	脇 佳ノ介	男	鹿児島県立加世田常潤高等学校	1	南さつま市
11	井手 優歩	女	学校法人川島学園鹿児島実業高等学校	2	肝付町
12	池田 茜	女	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	2	日置市
13	梶山 莉早	女	鹿児島県立加治木高等学校	2	始良市

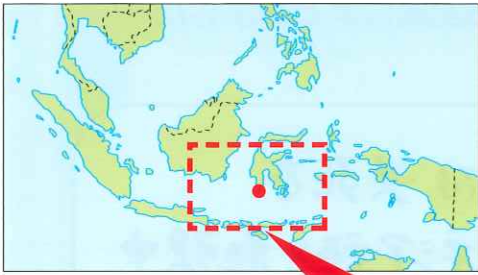
■ 同行者

	名 前	性別	備 考
1	团长 弓場 秋信	男	鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長
2	調整 松木 順治	男	財団法人鹿児島県国際交流協会 総務企画課長
3	調整 竹下 夏美	女	青年海外協力隊インドネシア共和国OV (看護師)
4	健康管理 柳元 理恵	女	青年海外協力隊ドミニカ共和国OV (看護師)
5	しげ重 吉亮 佑	男	南日本新聞社編集局社会部 記者
6	ほん本 坊伊知子	女	MBC南日本放送報道局報道部 記者

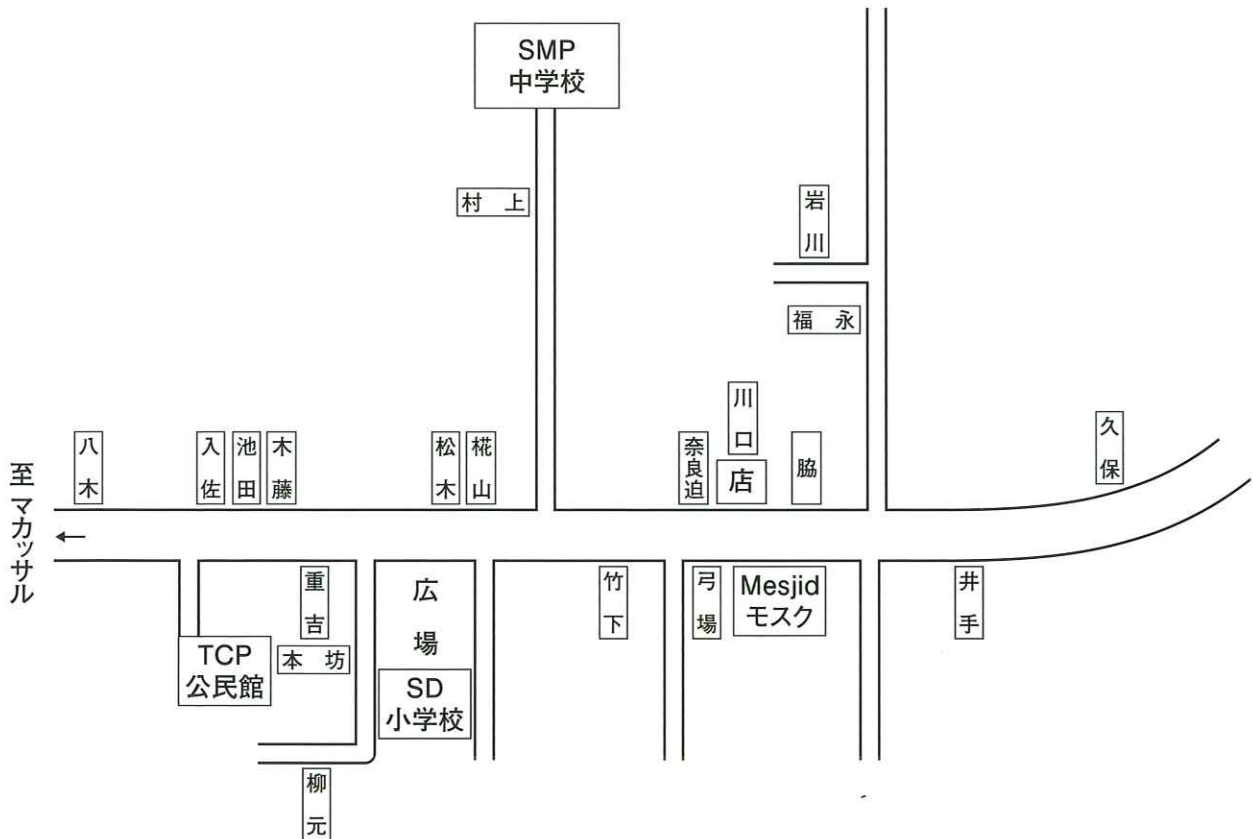
スケジュール

月日	曜	地名	時刻	交通機関	内容	宿泊
8月1日	日	鹿児島発 ソウル着 ソウル発 ジャカルタ着	9:00	飛行機	集合・チェックイン・結団式 ホテルへ移動	ホテル
			12:10発			
			13:45着	飛行機		
			15:45発			
20:35着	バス					
8月2日	月	ジャカルタ	9:00発	バス	ホテル出発	
			9:30-11:00		JICAインドネシア事務所 表敬	
		ジャカルタ発 マカッサル着	15:10発	飛行機	マカッサルへ移動	ホテル
			18:30着	バス	ホテルへ移動	
8月3日	火	マカッサル	10:00発	バス	ホテル出発	
			10:00-13:00		JICAマカッサル事務所 表敬	
		14:00-16:00		青年海外協力隊員活動視察 伊東和希子隊員（野菜）		
		ピナバサ村	17:00着		ピナバサ村ホームステイ先へ移動	ホームステイ
8月4日	水	ピナバサ村			終日ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
8月5日	木	ピナバサ村	8:00発	バス	村を出発	
			9:00-11:00			
			14:00-16:00		青年海外協力隊員活動視察 熊倉百合子隊員（青少年活動）	
			17:00着			ホームステイ
8月6日	金	ピナバサ村			現地中学生との交流会	ホームステイ
					お別れ会	
8月7日	土	ピナバサ村 マカッサル発 ジャカルタ着 ジャカルタ ジャカルタ発	8:30発	バス	村を出発	
			11:00発	飛行機	ジャカルタへ移動	
			12:15着	バス	ジャカルタ中心部観光	
			22:05発			
8月8日	日	ソウル着 ソウル発 鹿児島空港	7:05着	飛行機	解団式（国際線ロビー）	
			9:30発			
			11:00着			

地図



ビナバサ村（ホームステイ先）



体験事業ドキュメント

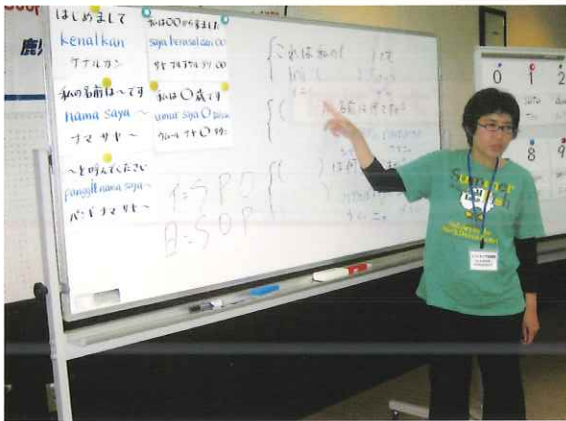
～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

6月12日(土), 7月3・4日(土・日)

第1回・第2回 事前研修



みんな必死で
インドネシア語を勉強中
この日でメンバーとも
だいぶ仲良くなったよ!



8月1日(日)

結団式・出発



1人1人が思いを
いたして
いざ、出発!!



乗り換え地・ソウルで



ソウルの空港で
歌の練習をしました!

みんな喜んでくると
いいね!♡

ジャカルタに到着



8月2日 (月)

ジャカルタの朝



JICAインドネシア事務所 表敬



ジャカルタにて昼食



マカッサル到着



現地のスタッフ
の方々と
ともやまして
フレンドリー

8月3日 (火)

JICAマカッサル事務所 表敬



青年海外協力隊活動視察
伊東和希子隊員 (野菜)



伊東隊員の活動は、有機農法を伝える大切な活動。村人と協力してインドネシア全土に広がるように頑張っていました！ 少し体験もしました大変だけどやりがいのある仕事です！

ホームステイ先ピナバサ村へ

日本とインドネシアの旗を
ふりながら出迎えてくれたよ！

みんなの笑顔が
まぶしかった！



8月4日 (水)

村での1日



この日は1日中ホストファミリーと
過ごしました!

レンガ造りや シランシラン(散歩)、
農業の手伝い、学校訪問など。

村の生活にも

だんだん慣れてきたよ!



8月5日(木)

青年海外協力隊活動視察
① 淵鏡隊員 (保健師)



田淵隊員は子供たちに歌で
手の洗い方をおしえていたよ
笑顔で活動する姿は
とても輝いていました!



青年海外協力隊活動視察
② 熊倉百合子隊員 (青少年活動)

教室に入りきれないくらい
の人数だったよね!
熊倉隊員もびっくり!?
たくさんの人とコミュニケーション
をとって楽しかったね!



8月6日(金)

子ども達との交流会

マンギンマシリ という歌を
ギターで演奏付きで!!
練習の成果が出せたかな?!



書道、空手、茶道、おり紙
を披露。みんな楽しんで、
日本とインドネシアの文化の交流
ができました!



8月6日 (金)

お別れ会



感謝の気持ちと涙で
いっほいのお別れ会。
大切な家族が
もう一つできました!!



8月7日 (土)

別れの朝



お会いに
来ます!!
まってね!



8月7日 (土)

ジャカルタへ



村で過ごした
4日間を思い出しながら、
いろんなことが
あったよね。

8月8日 (日)

鹿児島に到着

ついに鹿児島に
戻ってきました!
みんな疲れたけど
とても充実した
8日間だったね!



解団式



8日間の体験で
学んだこと、考えたことをみんな
が熱く語りました。
「またインドネシアに帰ります」
とみんなが宣言。
本当に行きたいね!
インドネシア大好き!!

8月12日 (木)

表敬訪問



8月21日 (土)

帰国報告会



“インドネシア”を訪ねて思うこと

鹿児島中央高等学校 2年 岩川 朋之

今回、8月1日から8日までの7泊8日にわたってインドネシア共和国を訪れた。本当にたくさんの思い出があるが、その中からいくつか記していきたいと思う。

まず、「格差社会」についてだ。初日に滞在した首都ジャカルタはびっくりするほどの大都会だった。あまりにも立派なビルやマンションが立ち並び、開発途上国という国のイメージを危うく消してしまうところだった。

しかしそんな東京のような眠らない街も中心部だけで、路地裏にはスラム街があり、ゴミがそこら中に捨てられた汚い都市でもあった。その後、私たちのホームステイするマカッサルという都市のビナバサ村へと飛び唾然とした。同じ国とは思えないのだ。道路はボコボコだし、家も古く、生活もその日暮らしの人々が何とか生活しているような村の光景だった。

例えば日本では地方の村に行ってもほとんど湯の使える風呂があり、冷蔵庫があり、エアコンがあり…と最低限の文化的近代機器はそろっている。しかしインドネシアではちがう。水のたまった桶からすくって体を洗い流すだけ、トイレもいわゆる手動で流す形だし、TVはあっても決して写りがよいとなんて言えない。私はそれでもその状況に文句も言わず、抗議もせず生活している姿に感服した。

今このように述べたけれどもよく考えてみるとこんな考えが「格差」につながっているのではないだろうか。私たちのメンバーのほとんどが日本に帰ってたくさんTVを見て、熱いくらいの湯で体を洗え、いつもやっている生活がいかに豊かで、ある程度ホッとしたと思ったはずだ。その瞬間、インドネシア人と日本人との間で格差が、心の格差が生まれてしまっているのだと思う。私自身、そんな考えを一瞬でも考えてしまっ



本人：右から2番目



たことに腹立たしくなった。「人は一人ではなく、誰かに助けられ、誰かを助けながら生きていてそのことに感謝」すべきであろうと思う。しかしだからといっていきなり日本でインドネシア人のように暮らせと言われても無理だろう。

だから今、生きていてこのような生活を送れていることがあまりに特別なんだと理解し、先ほど述べたように「当たり前」という心を「感謝」に変えることから始めて「心の格差」から消していきたい。

次に感じたことは、日本の若者にはあまり見受けられないことかも知れない。それはインドネシアの人々は子どもも大人もとにかく正直で素直で人柄がいいのである。喜ぶ、悲しむ、楽しむ、怒る、泣くそのようないろいろな感情をストレートに表現する。無視や、黙りこもだなんて言葉はもしかしたら日本人のためだけにあるのかもしれないと思ったくらいだ。バスでの移動中に街を歩く人々に手を振るとみんな笑顔で振り返してくれる。一生に一回のただそれだけの出会いかもしれないが互いの心がとても温かくなる。ホームステイ先のファミリーと会ったときには超熱烈な歓迎だったし、最後の日には涙まで流して抱きしめてくれた。日本人には心からこんな出会いと別れに感謝して生きる人はいるのだろうか。本当にびっくりしてしまった。

今回、インドネシアという国で気づいたことは本当に多かった。「文化」という面での大きな違い、「感情」の捉え方の豊かさやユーモアのすばらしさ、そして何よりもこのグローバル化一直線の世間の端を見た、私自身の「心」が変わったことなどなどだ。

世界で一番熱く刺激的な経験をした8日間と夏が終わっていく。どこかの国で朝が来て、夜が来てまたいつも通りの変わらない一日を63億人すべてが笑顔で送れる訳ではない。この活動を通して将来私も青年海外協力隊員の一人となって少しでも笑顔の花を咲かせてあげられたらと思う。

今回、このような貴重なすばらしい経験をさせていただいた家族をはじめ、各担当の先生方、本当にありがとうございました。

インドネシアで学んだこと

甲南高等学校 2年 八木真理奈

私がインドネシアに行って最初に感じたことは、ここは本当に発展途上国なのだろうかということでした。なぜなら、首都ジャカルタに着いて初めて見た光景は高層ビルや高級ホテルが建ち並ぶ東京のような大都市だったからです。夜でも明るくたくさんの人や車が行き交い、とても賑わっていました。こんなに発展しているなら日本からの援助なんていらんんじゃないかなと思うぐらいきれいで十分発展しているように感じました。しかし、その思いはすぐに消えざりました。バスで空港を出てホテルに向かっていくとたくさんのスラム街が見えてきたのです。高いビルやホテルの間に挟まれるようにあるスラム街。この光景をジャカルタでは何回も目にしました。スラム街で暮らしている人々はその日暮らしてなんとか生計を立てています。スラム街は電気や水道がきちんと整備されていないところがほとんどで、衛生面における課題もまだまだたくさんあるそうです。この光景を見たり話を聞いたりして、インドネシアの「格差」の問題は私が考えていた以上に深刻なんだと強く思いました。月十万円もする高級マンションに住み外車を何台も所有している人もいれば、スラム街で明日に不安をかかえながら暮らしている人もいます。どうしてこうなったのだろうかと思わずにはいられませんでした。JICAインドネシア事務所で聞いた話では今インドネシアはすごいスピードで発展しているが「格差」の問題は依然としてありインドネシア政府も力を入れてこの問題に取り組んでいるとのことでした。日本の援助がこの「格差」



本人：右

をなくす大きな力となればよいなと思いました。

また、ホームステイをしたマカッサルのビナバサ村では「人の温かさ」を感じました。私のホームステイ先は六人家族で私と同じ歳の女の子がいて、いつも明るく楽しい家族でした。インドネシアの生活様式は日本に似ているところもありましたが、食事やお風呂などは日本とは全く違いました。食事は右手だけを使って食べ、お風呂もお湯はなくタライに入った水をあびるというような感じです。最初の日には環境の違いにとまどい少しだけ不安になりましたがホストマザーが「大丈夫」と笑顔で言ってくれたおかげで安心して四日間すごすことができました。ホームステイ最後の夜はお別れ会がありホストマザーが「娘が一人増えたみたいで楽しかった。この子が私の家に来てくれて本当によかった。」と言ってくれた時、私はおもわず泣いてしまいました。四日間はあっという間だったけど、本当に充実していてホストファミリーの「温かさ」に



本人：左

触れ、感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。インドネシアに行って本当によかった、また行きたいと今でもそう強く思っています。

今回のインドネシア派遣事業でインドネシアに対する見方や考え方ががらりと変わりました。インドネシアには「格差」をはじめとする多くの問題があります。しかし、インドネシアの「人の温かさ」を持ってすれば、問題は解決していくと思います。今回学んだ数多くのことをこれからの進路や人生に活かしていきたいです。そして、今より一回りも二回りも成長した姿で、ホストファミリーのところに帰りたと思います。

今の現状、今後の課題

甲東中学校 1年 入佐 彩加

今思えば、8月1日から7泊8日のインドネシアでの体験事業はあっという間だった。しかし、この機会を通して私は、大きく成長できたと思う。

一般的に、インドネシアは開発途上国と言われている。行く前の私は、日本の田舎を想像していた。

しかし、いざインドネシアの都市ジャカルタに到着すると、私のイメージとはまるで違い、建物の高さ、自動車、バイクの量、そして周りは人、人、人。本当に開発途上国なのかと思った。日本の首都、東京より発展しているのではないかと思った。その後、私が向かったのはスラウェシ島のマカッサルだ。ジャカルタ程ではないが、ここでも建物の高さや自動車、人の数では鹿児島より発展しているのではないかと思った。私は自分の間違っただけの思い込みがあった。日本が先進国で進んだ国だと思っていたことだ。しかし、この現状を見たとき世界を知らない自分を思い知らされた。

けれど、そんな都市でも一歩前を出て周りを見れば、インドネシアが開発途上国と呼ばれる意味がわかるような気がする。なぜなら、沢山の「かくさ」が目に入ったからだ。ホームステイ先の村に行くまでの間でも格差の違いが激しく、私は大きなショックを受けた。村民の収入の格差が大きく、生きていくこともやっとな人も多く、またお金持ちとそうでない人と地区でわかれており、少し違和感を感じた。マカッサルが都会と知られていてもそこから少し離れた場所では、発展が遅れ、同じ国の人々が場所の違いだけで笑顔になれないということが、今のインドネシアの現状だと私は思う。それではホームステイ先の村、ビナバサ村はどうだろうか。8月3日、ビナバサ村に到着。恐れと疑問



本人：前列中央左

でいっぱいになった私は、おそろおそろ一步を踏み出した。しかし恐れと疑問など、どこかに飛んでいくように感じられた。村の人々はみな温かく、キラキラとした瞳で生き生きとしていて、笑っていたからだ。

この村は農家が約70%で20%がレンガ職人及び販売人。残り10%はその他の職業で成り立っている。村民以外の人をあまり見かけない。しかし村民は、夢や将来やりたいことをきちんと持ち、努力をしていた。今の日本人が忘れかけていた勤勉さ、やる気を感じた。私はインドネシアは今後、発展していく国だと感じた。反対に今後の日本の未来はどうなるのだろうかと思った。

私にとって、JICA・青年海外協力隊の活動を視察する時間は、とても貴重な時間だった。この時間で、宗教や言葉、文化の違いはあるが、人々の考え方や感性は日本人と、とても近くに思えた。インドネシアの人々は、今後良いパートナーとなれると感じることができた。

私はこの体験事業のおかげで、今後の自分の課題を見つけることができた。インドネシアは収入の格差により、勉強をしたくても出来ない人々がいる。その人々のために、無料で授業が受けられる学校がある。しかし、制服代や交通料がかかり、通えない人々も多い。たとえ登校が出来たとしても、教師や生徒がいないときもある。日本は勉強が出来る環境でありながら、実行する人は少ない。勉強をしたいという気持ちと実行することを、日本は忘れかけているのではないだろうか。私も忘れかけている1人だと思うからだ。

だから私は、自分から忘れかけていた気持ちを取り戻して、勉強が出来る環境に感謝し、周りも変えるということが今後、私の課題である。

最後に、私はこの体験事業を通して多くの人の想いや考え、インドネシアの文化や生活にふれることが出来た。それは、私にとってとても貴重な体験で、今後に生かせる機会となった。今回この事業を開いてくださった方々、支えてくださった方々に感謝したい。



インドネシアの生活

鹿屋高等学校 1年 久保 健太

ぼくはインドネシアに行く前まで、インドネシアは田舎なんだろうなと思っていました。なぜなら、いろいろな人がインドネシアは開発途上国だと言っていたからです。しかし、実際に行ってみると思っていたよりかなり発展していて、首都ジャカルタの高層ビルが建ち並び風景は、もうインドネシアは他の国の援助がなくても大丈夫なのではないかと思うほど都会でした。しかし、実際は格差が大きく、貧しい人もたくさんいたり、課題が多く残っていて、ぼくはそういうところがまだ開発途上国なんだなと思いました。

そして、ぼくたちがホームステイをしたピナバサ村は、スラウェシ島の南にある農業が盛んな村でした。ぼくがそこで驚いたことは、1つ目に小さい子どももバイクに乗っているということです。次に、携帯電話をもっている人が多いということです。最初は、家電製品もほとんどないのになぜ携帯電話をもっているんだろうと不思議に思っていました。よく考えてみると、普通の置く電話機がないからだろうなと思いました。

ホームステイの初日、ぼくは全然話が通じず、本当にここで何日も生活できるだろうかととても不安でした。しかし、ホームステイ先の家族はとてもやさしくて、だんだん安心してきました。そして、この日一番印象に残っていることが、おかしがよく出てくるということです。ぼくが来ていたから特別に多かっただけということもあるかもしれませんが、揚げたバナナや魚のせんべいなど油を使ったものが多いなと思いました。あと、家の中によくヤモリがいたのですが、そのヤモリが「キャッキョッキョ」と鳴いたのはとても驚きました。そして、食事は床にしき物をしいて床の上で食べました。レストランなどでの食事は辛い物



本人：中央

が多かったのですが、家での食事は、ぼくがいたからというのもあるかもしれませんが、全く辛くなかったです。照明は、数が少なく、あまり明るくなかったです。自然と早い時間に眠くなりました。寝る時はベッドで、蚊帳をつけて寝ました。ベッドは日本と変わらなかったのですが、寝る時には布団ではなく、筒状の布を巻いて寝ました。この筒状の布は部屋で着替えて風呂場に行く時にも使いました。風呂は、最初はシャワーかと思っていたんですが、なんと、ためてある冷たい水を洗面器ですくって浴びるだけでした。毎日温かい風呂に入れるのは幸せなんだなと思いました。

次の日の朝は洗濯をしました。洗濯機など無いので、洗剤を使ってブラシでこすって洗うと教えられ、やってみると汚れがよく落ちました。洗濯した物を干すのは日本とまったく同じでした。そしてこの日は、村の公民館にみんな集まって、日本とインドネシアの互いの遊びを教え合いました。言葉は通じなくても、遊びの楽しさというのはどこの国でも通じるんだなと思いました。あと、村の子どもたちはドラえもんを知っていて、ドラえもんの歌を日本語で歌っていたので、有名なんだなと思いました。その日の夜は、ぼくがインスタント味噌汁とのりを出して、食べてもらいましたが、おいしいと言いながらも、顔はあまりおいしくないというような表情でした。

田んぼやレンガを作っている所に散歩に行った日もありました。田んぼではちょうど稲刈りの季節でしたが、日本と違って稲刈り→干す→だっこの順ではなく、だっこしてから、シートの上に干していました。だっこも、日本と違い、板で稲をたたいて米を落とすというものでした。帰ってきてからは、ヤシの木から実を落としてもらって食べました。思っていたより甘くなかったけれど、とてもおいしかったです。

最初は不安だったけれど、だんだん慣れてきて、最終日になってみると本当にあっという間でした。この一週間のことは一生忘れないようにしたいです。



インドネシアへ行って

大始良中学校 1年 木藤 友香

私は、インドネシアに行って日本との文化の違いや物を大事にすることを学びました。日本のお風呂は、お湯が出て、水道水はそのまま飲む事ができますが、インドネシアのお風呂は水浴びで、水道水はそのままでは飲む事ができません。インドネシアの人達は、とても親切で優しく、いつも笑顔でした。

ホストファミリーは、会話帳を使って私にインドネシアの言葉を教えてください、私は家族の写真をインドネシア語で紹介しました。その時、私の言葉が通じたので、とてもうれしかったです。

ホストファミリーと一日中、一緒にいる時間がありました。朝は、6時に起きて水浴びをしました。それから、ホストファミリーのお母さん、お姉さんとインドネシアのお菓子を作りました。まず、白玉粉を小さく丸めて、その中に黒砂糖のような物を入れてゆがきます。それから、椰子の実の皮を削ったのをつけたら、出来上がりです。味は甘くて、椰子の実の皮は味があまりしなかったけど、歯ごたえがとてもよかったです。また、そのお菓子を日本でも作りたいです。

家の近くには、池があり、飼っているアヒルをそこへ連れて行きました。その間にお母さんが、アヒルの卵をとり、お昼に食べました。卵は、うすい緑色だったので少し驚きました。味は、日本の卵と変わらなかったです。

それから、お祈りをする所に行きました。その時、バナナを供えました。

その後、お父さんの仕事のレンガ作りの現場へ行



本人：右から2番目



きました。シャベルで土を掘り、水を加えて足でふみ、その土を丸めて扇型の木枠に詰めていきます。その時、お父さんは100個位つくりました。

日本では、機械で行う事もインドネシアでは手作業が多いのだなと思いました。

又、青年海外協力隊の活動なども見学しました。日本とインドネシアが協力しあって、活動がなされていました。

インドネシアに行き、コミュニケーションの大切さも学びました。今度、インドネシアに行く機会があれば、会話ができるようにしっかりとインドネシア語を勉強していきたいです。

今回、多くの皆さんのお陰でインドネシアに行く事ができた事を、大変感謝しております。ありがとうございます。これからの自分の将来に活かしていくことができるように、頑張っていきたいと思います。

ぼくの旅

陵南中学校 1年 村上将太郎

ぼくは、この夏休みに鹿児島県青少年国際協力体験事業で、霧島市、日本の代表としてインドネシアへ行って来ました。インドネシアでは、主に青年海外協力隊の活動の様子を見学したり、体験したりしました。

インドネシアでの、まず最初の2泊はホテルでした。移動途中で、ジャカルタやマカッサル等の都市の中心部を見て思ったのは、「こんなに栄えているのだから、日本の援助はいらないんじゃないかな」ということでした。でも、3日目ホームステイ先の村への移動で、都市の中心部から離れていくと、どんどん貧しそうなお家や見た目になってくるので、ぼくは、「こういう所にこそ、多く援助すべきだ」と思いました。

その日は、協力隊の伊東隊員の所へ視察に行きました。伊東隊員は、タカラールという所で農業の指導をしていました。そこでは野菜を作っていて、日本円に換算するとたったの20円位だそうです。ぼくは、その安さにびっくりしました。そこで、伊東隊員のお話が聞けなかったのが残念でした。

視察が終わると、少し移動してホームステイ先のピナバサ村に着きました。着いたら、すぐ公民館で対面式があってステイ先に行きました。そこでびっくりしたのが、家の中に入ると20人以上の人がいたことです。たしか、5人家族のはずなのだと思います。

着いてから、お土産を説明しようと皆のいる所へ行って、ぼくが「お土産です」と言った瞬間、皆が袋の中のお土産を持って行ってしまいました。

ステイ先の子にロケットえんぴつの使い方を説明し



本人：後列右から3番目

ようとして、「ちょっと貸して」と言っても、取られると思ったようで、ぜんぜん貸してくれませんでした。説明できなかったのがガッカリしました。

少し時間が過ぎると、ホストファミリーと慣れてきました。ぼくが、ホストファミリーとの生活でびっくりしたことは、お風呂とトイレが一緒に、お風呂の水は井戸からくんだ水を利用して、用を足した後も同じ水をくんで流していたので、ちょっと違和感がありました。

3日目は、協力隊の方2名の視察に行きました。

まず一人目は、田淵隊員です。田淵隊員は保健師として来ていて、小学校で手洗いや歯磨きの仕方を指導されていました。他にも田淵隊員は、診療所でも勤務していて、診察を受けたい人はカードを見せることで無料にする事を目指しているそうです。他にも生活環境を整えるために、蚊を殺す薬をまいたり、トイレを作りましようと呼びかけたり、妊婦さんに栄養の勉強をさせたり、訪問診療をしたり、村に出向いて診療をしたりしているそうです。多くの仕事をこなしているなんて、とてもすごい事だと思いました。

次は熊倉隊員の所へ行きました。熊倉隊員は、青少年活動という活動をされていました。青少年活動というのは、子供の時に学校へ行けなかった人達に学校の一室を借りて授業をしているそうです。授業では、主に技術指導をしているそうです。

ぼくは、自分の技術を教えてお店を出店する生徒がいるなんてすごい事だと思いました。

ぼくは、今回の事業を通して、青年海外協力隊の方はインドネシアのためと精一杯やっていてとても尊敬するし、とてもかっこいいと思いました。



インドネシアから伝えます

池田高等学校 1年 川口みなみ

8月1日、私たち鹿児島県青少年国際協力体験事業の団員13名はJICAの見学、青年海外協力隊の視察という目的でインドネシアの首都、ジャカルタへと出発しました。世界の為、発展途上国と呼ばれている国の為に少しでも何かできることはないかと、その何かを見つけてこようという思いを胸にして現地へと向かいました。



本人：後列中央

私の予想ではジャカルタは自然豊かな場所だと思っていましたが、いざ行くとこれが本当に発展途上国かと思うくらい都会でした。ですが、発展していたのも街の中心部のみで、小さな路地に入ればスラム街のような場所で生活している人も沢山いました。周りには高級ホテルが建っていたり、道路では高級車が走っていたりなど同じ地域でも貧富の格差が大きく、カルチャーショックを受けました。

4日目には、ホームステイ先の家族との対面でした。私たち団員は、スラウェシ島のピナバサ村にある家庭に一人一家族という形でホームステイさせていただきました。もちろん、日本とは文化、生活習慣なども違うので最初はとまどいました。又、やはり言葉の壁とは大きいもので伝えきれなかったことも沢山ありました。でも家族はとても親切で、村の人たちは初めて会ったのに挨拶もしてくれて、毎日楽しく、笑顔で過ごすことができました。笑顔が絶えない村だったので、彼らは本当に心が豊かなのだと感じました。でも正直、生活は便利なものとは言えませんでした。水道はなく、井戸が生活の源という感じで、家の中心にあります。その井戸から料理、洗濯、マンディー（日本でいう風呂）まで行われます。想像はつくかと思いますが、日

本のように整った設備もないので、あまりきれいな水とは言えません。そのうえ、その水を使って料理もするわけですから、衛生的にもよくないと感じました。村の市場につれていってもらったのですが、魚や野菜などは全く包装が施されてありません。だから暑い夏には虫がたかりやすかったり、腐りやすかったりします。又、廃棄物の処理なども問題の一つです。商品の包装などはしていない事が多いので、人工的なごみはあまりでないのですが、生ごみ、古くなった雑巾、洗剤などは近くの沼や畑にすてます。目に見える場所には必ずと言っていいほどごみが落ちていているといっても過言ではありません。しかしそれが現地の生活でできる廃棄物の最も良い処理方法なのであり、現地では自然なことなのです。私は、今必要なのは衛生面・廃棄物処理などの指導やそれらを改善する為の知識なのだと感じました。

今回の研修での大きな目的である、JICA及び青年海外協力隊員の活動を視察させていただきました。その事について伝えようと思います。先程も述べた事ですが、都市部とそうでない地域では格差が激しいことが分かったと思います。やはり実際に目で見てみると、本当に同じ国なのかと思うくらいに生活環境も違います。その格差、衛生問題、食糧問題、学校に行けない子供達。そういった問題を解決、改善するために彼らは働いているのです。地元の中学校にも訪問させていただいたのですが、先生が来ない日や、生徒が十分に登校しない日などには、臨時的活動をしている隊員の方もいらっしゃいます。隊員全員が何事にも一生懸命で真っ直ぐで真面目、そして熱い心を持っているんだと感じました。人間として目標にしている人達です。

私が今できることは何があるだろう、日本に帰国して考えてみました。寄付でしょうか。一人の寄付でも何かが変わるかもしれません。私ができる事。私が実際見たこと、聞いたこと、感じたことをできるだけ多くの人に伝えて興味を持ってもらいたい。それが今の私の出来ることであり、同時に私の願いでもあります。

最後に。素晴らしい体験をさせて頂いた、関わってくれた方全てに感謝しています。



貴重な夏

松陽高等学校 3年 奈良迫ひかる

私は今回のこの事業に参加できて本当に良かったと思う。インドネシアに降り立って初めに目にとびこんできたものは、日本より高いであろうビルや大きな広告、車など、とても発展途上の国とは思えないものばかりだった。自分の想像していたインドネシア像とはかなり異なっていて驚いた。JICA本部ではインドネシアと日本のこれからや、JICAの目標などのお話を聞き隊員それぞれの意見なども交えて中身の詰まった時間を過ごせた。

インドネシアは島国だ。日本の国土面積の約5.5倍もあり人口は世界で第4位を誇っている。島は約1万7千もある。想像できるだろうか。非常に広大で複雑な国だと分かる。

首都ジャカルタからスラウェシ島に渡り、私達のホームステイの場所となるマカッサルのビナバサ村へ向かう道では、近づくにつれて山や田んぼが多くなり、一面田んぼの村に着いた。村では歓迎会が開かれていて村の子供たちが踊りを披露してくれた。エネルギーで暖かい歓迎に感動し自然と涙がでた。

私のホームステイ先の家族は3人のはずだったがなぜか8人ほどに増えていた。となりの家の親戚が集まっていたのだ。家に入ると電灯は1こしかなく家族の顔がはっきりと見えないほど暗かった。日本で勉強していたはずなのにうまく言葉が出て来なくてどっと汗をかき、この4日間うまくやっっていけるだろうかとても不安になった。でもその夜から一緒におり紙などをして楽しく過ごした。言葉は指さし会話帳がとても役に立ち、家族は一生懸命私の伝えたいことを理解しようとしてくれた。一日中村にいる日、家族と2人で散歩に出かけた。子供たちは学校へ行っていて、日本のみんなは今ごろは夏休みだなと思いながら家周辺



を歩いた。道は主要となる道の他は舗装はされていない。でこぼこしているし、雨が降るとぬかるむ。日本では今はあまり見ることのない、でも昔はあたり前だった光景がとても新鮮だった。子供たちがたくましく登校しているところを見て、私も頑張らないといけないと思った。

日本では学校に通うことが規則となっているがインドネシアはまだそこまで進んでいない。教師が来ても生徒が来ない。生徒が来ても教師が来ないという状況がよくあるらしい。話には聞いていたことだったが、実際に現地で学校を見ると何とももどかしい気持ちになった。もう一つショックを受けたことが、「ごみ」である。家の周りにはゴミがすてられてごみ箱がどこを探してもなかった。ジャカルタも川のすみにゴミがたまり木々の間にごみ袋が山積みされていた。

インドネシアがかかえる問題は目に見えないところでも増えている。JICAが他国に派遣し活動する青年海外協力隊はいつも手さぐり状況で問題を解決していく。これらの活動は当然ながら魔法のようにうまくいくわけではないということを今回の視察やお話を聞いた中で実感した。

村でのホームステイでは、村人の人の良さ、そして優しさが心にしみわたるようありがたかった。小さな心配りには本当に頭が下がる思いだった。最初はうまくいかなかったコミュニケーションもだんだんと慣れてきたのに別れてしまうのが悲しくて旅立つ日の前に感極まって泣いてしまった。なぜ?と聞かれたときにうまく気持ちを表現できなかった。顔を上げると家族もそれから近所の人も涙ぐんでいて、本当に心のやさしい人達だと思った。別れの朝、朝食をお腹いっぱいいただき外に出た。近所のおばさん、親せきのおばあちゃん、子供たちと1人1人握手をしてありがとうと伝えた。家族は日本に帰る私に一人ずつおみやげを持たせてくれた。生活も苦しいはずなのに最後まで気を遣ってくれた家族に何回ありがとうと言っても言い足りなかった。この家族と出会えたことを一生の誇りにして、もっとインドネシア語を勉強してこの家族に会いに帰りたい。この事業で学んだことをできるだけ多くの人に伝えようと思う。



本人：右

大好きなインドネシアで感じたこと

鳳凰高等学校 2年 福永梨々子

「ああ、インドネシアに帰りたい。」これが私の口癖になってしまう程、インドネシアは素晴らしい国で、私を魅了した。鹿児島に帰ってきて2週間が経つが、インドネシアを思い出しては恋しくなる。これ程楽しかったインドネシアの旅を振り返ってみる。

小学生の頃から青年海外協力隊に憧れていた私はこの事業に参加できることになり「協力隊員の方の活動現場をしっかりと目に焼き付けてこよう」とだけ考え、旅立った。私たちは3名の隊員の活動現場と2か所のJICA事務所を訪れた。JICA事務所ではインドネシアで行われている活動や現状について詳しく話して頂いた。中でも私の印象に残っていることは、日本が行っている無償資金協力で高速道路などを作っていること。インドネシアの水道普及率は非常に低いこと、ゴミ処理の設備が十分に整っていないことだった。人の家の水道管に穴を開けて自分の家に水道を引く、という話や、どんより曇った空の下の真っ黒なゴミの山の写真は忘れられない。

そして、青年海外協力隊の視察では、隊員の方に密着できた。隊員の方の活動しているその姿はとても輝いていた。現地の方も、その隊員を受け入れ、学び、互いに信頼しあっているのを感じた。私の憧れる隊員像に最も近いのが、青少年活動をしている熊倉隊員だった。貧困が原因で学校に行けない生徒を集め、自立するための技術修得講座をしていた。生徒が学んでいる姿を見て、学校の大切さを痛感した。また、青年海外協力隊は現地の人々から必要とされていることも分かった。



本人：中央

そして私はホームステイを初めて体験した。私たちがホームステイしたビナバサ村は、畑に囲まれ自然で溢れていた。私たちを村全体であつくもてなして下さった。ホストファミリーは優しくてあたたかかった。家族仲がよく、助け合って暮らしていた。また、村全体も仲がよく、皆家族のようだった。

ホームステイ先で驚いたのは、お風呂がなく水浴びをすることだった。家に水を引いていないので、井戸から汲み上げた水が生活用水なのだ。それと、家にゴミ箱というものがなく、床に落ちていたり窓から捨てるのが普通だった。このように、インドネシアの衛生面は良いものではなかった。



マカッサルで買い物したときのことである。買い物を終えて店を出たら、小さい男の子が手を差し出して何か言いながら近づいてきた。その子はお金を欲しがっていたのだ。このようなことは勿論初めてで、非常に驚いた。お金をあげたら仲間をつれてくるということで私はお金をあげず、どうすることもできなかった。何もできない悔しさやもどかしさが強く心に残った。

都市部には立派な高速道路と高層ビルがあり、その傍らではストリートチルドレンが暮らしている。地方では水道も通っていない。都市部の発展は勿論大切だが、それより先に衛生面や教育面など改善すべき点があるのではないかと感じた。そして将来、私にもできることがきっとあるはずだ。そういうことを探し、私も協力したい。

インドネシアは本当に笑顔で溢れていて、本当に素晴らしい国だ。今回この事業に参加してこの国にめぐりあえたことを本当に幸せに思う。この旅の思い出はかけがえのない一生の宝だ。

インドネシアで

加世田常潤高等学校 1年 脇 佳ノ介

「ここはどこだ、鹿児島に戻ってきたのか。」空港から出ると、小さなビルや駐車場、木、車などがある景色が私を待ち構えてくれていました。その景色の中にある物のだいたいは我らが鹿児島にある物と重複していました。

その中でも極めつけは、アルファベットで「ホカホカベントー」と書いてあるお店の看板で私の心に大きなショックを与えました。それを見た瞬間私は「ふざけんな」と怒鳴りそうになりました。なぜインドネシアに来てまでホカベンを見ないといけないのだという気持ちが私の心を満たしました。そしてバスに乗り、バスが動きだし、ホカホカベントーが見えなくなり、ホンの少し移動したらまた新しい景色が私を迎えてくれました。その時、私の頭に1つの単語が浮かび上がりました。「シティー」、都市、市という意味がありません。私は中学1年のころ東京に行ったことがあります。あそこよりも「都会」という感じがしました。「この分では、ホームステイに行く村も最初に思っていた以上に都会かな」と思い、いざ村に行ってみると、最初に思っていたとおりでした。

村に着き、ホームステイするお宅に無事に着き、ホストファミリーの方々に自己紹介が済み、とにかくやるべきことの一連の動作を終え、一瞬、0.2秒くらいほっとしていた所、ホストファミリーの方に予想外の質問を受けました。「恋人はいるのか。」と聞かれ、「中学生の修学旅行の夜か。」とつっこみたくなりました。そこで私は正直にいないと答えたら、笑われました。20秒くらい。5秒くらいならわかりますが、20秒とは少々失礼ではないかと思いました。ですが逆にここまでやられると親近感が持てました。

そして、4日間ホームステイをしましたが、その4



本人：左から3番目

日間の間に思ったことがあります。それは、人間というのは、違う文化で違う場所に住んでいて、違うものを食べ、違う言葉をしゃべっていても、人間は人間で変わりはないと思いました。それは、ホームステイ中に家族の方々とボディーランゲージで9割の会話をしてきたとき、先ほどの恋人の話とは別に、私が話の中で笑いをとることができたとき、家族の方が私の背中をバンバンたたいてきました。その時、私の頭の中に走馬灯のようなものが駆けめぐりました。「そういえば、うちの学校にもそんな人がいたな、2名ほど。」

この走馬灯のようなものが駆けめぐった後には先ほどの思ったことが頭の中にもありました。そして日本へ帰国し、自宅に着き、思ったことが3個でてきました。

まず1つ目に、私が住んでいる町は今まで田舎だと思っていたのですが、村に比べるとビルディングがあり、アスファルトの照り返しがハンパではなく、「僕の町ってけっこう都会やん。」と思えるようになりました。2つ目に、自宅に着き、一週間ぶりの自分の部屋を見たとき「きったねえな」と思いました。インドネシアに行く前、掃除をするのを忘れてました。これからは清潔を心がけます。そして最後に村と自分が住んでる町の貧富の差について思いました。村の人達は本当に優しくかったです。村の子ども達も、すごく私のことを歓迎してくれました。私が子ども達に向かってカメハメ波をしたら、カメハメ波で返してくれました。そのくらい優しくかったです。ですがその村は発展途上です。ですから、その村の人々が持つてる優しさの分だけ、発展していったらなと思いました。

最後になりましたが、私はこの13名の中のリーダーをさせていただきました。ですがリーダーとして不足した面を多々見せてきてしまいました。そこは深くおわび申し上げます。



団員が感じたこと

絆

鹿児島実業高等学校 2年 井手 優歩

インドネシアでの一週間は、私の人生のうちで一番充実し、成長することができた一週間だったと思う。

私が初めて目にしたインドネシアはとても開発途上国とは思えないほど高層ビルの建ち並ぶ都会だった。しかしその一方で少し行くとスラム街が広がっていたりと格差を感じた。

街も景色も人々も見るもの全てが新鮮で、瞬きさえも勿体ないように思えた。

私達の活動内容は主にJICAのインドネシア・マカッサル事務所の表敬訪問や青年海外協力隊の活動視察、ホームステイを通しての現地の人々との交流だ。どれもめったにできない貴重な体験の連続だった。

事務所の人の話によるとインドネシアには格差や保健・衛生面、水道の設備やゴミ処理などの問題があるという。島国の為、平等に支援の手が回らなかったり、資源の片寄り・自然災害の影響だったりで格差が大きくなってしまいうらいしい。一つの問題を解決するのに何度も話し合いを重ね、実行してから実現するまでに何年もかかる。とても大切だけどとてもつまなく大変な仕事だ。

協力隊員の視察では3人の方を訪問した。医療・保健・農村部での野菜栽培、学校に行けない子ども達への教育と村の資金作りなどそれぞれがそれぞれの村で様々な分野で自分の持っている技術を最大限に生かして活動していた。

どの隊員も事務所の方もとても生き生きとして見えたし、現地の人々からの信頼はとても厚いものだった。

この活動をできる人でよかった。あちこち行って色々な人に会って…、そんな自分でよかった。やる事が多くて悩むこともあるけど、だからこそやっている。輝く未来の為に少しずつでも足跡を残していければいいな。笑顔でそう言う彼らはとてもキラキラと



本人：右から5番目

輝いて見えた。私も将来、こんな仕事に就きたいと心から思った。

日本がインドネシアを支援して50年が経つ。しかし、決してこの50年間日本は支援してあげていたのではない。支援することで生かされているのだ。そういう思いや考えを持って活動してきたからこそ信頼も理解も得られたのだと思う。何事にも思いやりを持つことが大切なのだと思う。

ホームステイ先の村ではとても歓迎してもらい、笑顔の絶えない毎日だった。村全体としてとても仲が良く、ホームステイ中にも沢山の人が遊びに来たり泊まりに来たりした。言葉の壁はあったけれど、心に壁は感じなかった。互いに理解しようとすることで言葉の壁さえも気にならないほどだった。

現地の中学生との交流会では書道パフォーマンスをした。

『絆～未来へと継ぐ国境を越えた輪この出会いに感謝～』私がインドネシアに来て感じた思いのままを書いた。書に込めた思いと意味をNiniに伝え、とても綺麗に訳してくれて、現地の人々から拍手をもらった。とても温かい拍手だった。

「知らない」ということが一番こわい。これまでの私が知るインドネシアは人から聞いたりしただけのほとんどよく知らない「よその国」だった。でも実際に行ってみて触れて、その国の空気を肌で感じ、人々とふれあうことで繋がりができ、友達も家族もできた。

相手の事を知ること、理解すること。それが結局は平和に繋がるのだと思う。

どういう形であってもどんな関係であっても協力することに意義があり、そこから和が生まれる。このような体験をする機会を設けて、より多くの人が国際協力や国際理解に直接的に触れ、学ぶことが大切だと思う。

私が今回この体験を通して学んだこと、感じたことをまずは同級生に、そして身の周りの人々に、できる限り多くの人々に伝え、知ってもらい、興味を持ってもらうこと。間接的ではあるがそうして少しでも理解してもらおうことが今の私にできる一番の国際協力だ。



インドネシアに行って

鹿児島中央高等学校 2年 池田 茜

わたしは今回インドネシアに行って、言葉の大切さと音楽のすごさを改めて感じることができました。今まで、学校で英語の勉強をしてきたけれど、今回のインドネシアでは英語ではなく、インドネシア語を話すということでした。インドネシア語なんて今までの人生の中で1回も使ったことはありませんでしたし、聞いたことさえありませんでした。事前研修では、今まで出会ったことのない言語をインドネシアへの期待とともに勉強しました。2回の研修でわたしたちは、簡単な自己紹介とあいさつの言葉を覚え、ついに8月1日たくさんの楽しみと少しの不安を胸にインドネシアへと旅立ったのでした。インドネシアについたのはその日の夜。バスガイドさんは上手な日本語を話し、ホテルの従業員の人たちは英語を使っていました。それでも、わたしたちのインドネシア語通じるかなあとドキドキしながら「テレマカシー（ありがとう）」と言うと、みんな笑顔で「サマサマ（どういたしまして）」と返してくれました。そのときは、とてもうれしかったです。3日目の夜、ホームステイ先へ行くまで全員で行動していて1人になることがなかったので、言葉で困ることはあまりありませんでした。そして、ついにホームステイ先に着き、ホストファミリーはみんなとても優しく、わたしは少し安心して自分は大丈夫だと思っていたのでした。でも、いざとなると何を話せばいいのかもわからずにとりあえず、ずっと笑顔でいました。わたしはお風呂に入りたかったけれど何と伝えればいいのかわかりませんでした。そんな風にしな



本人：左から3番目



がら過ごしていると同行の大人の方々が見回りに来てくださいました。わたしはホストファミリーに不満があって、日本の家に早く帰りたかったわけではなかったけれど、なぜか涙が出てきました。伝えたいことを伝えられなくて、相手の言っていることがわからないと、大丈夫だと思っけていても、心の奥は不安な気持ちでいっぱいになるんだと思いました。そして、言葉やコミュニケーション能力は本当に大切だということを実感しました。

また、インドネシアで歌をうたう機会がたくさんありました。わたしたちは日本でインドネシアの歌と日本の歌を練習していました。インドネシアの子どもたちは、「かえるのうた」や「大きな栗の木の下で」など日本の歌をたくさん知っていて、わたしはとてもうれしかったです。言葉は通じないけれど、歌をうたうと、自然にみんな笑顔になっていました。言葉や国を越えて音楽は世界共通の言語だったのでした。

ホストファミリーは、みんな笑顔でとても優しく、ホームステイした4日間は本当にあっという間でした。最初の日には伝えられなかったことなどもありましたが、1日1日伝えられることが多くなっていきました。初めはドキドキしながら使っていた「テレマカシー」という言葉も、何も考えなくてもずっと言えるようになっていました。やっと、言葉も少しずつ覚えて、コミュニケーションもとれるようになったというころには、お別れの日がやってきて、もう少しここにいたいという気持ちでいっぱいでした。

インドネシアに行って、日本ではあまりできないような経験をし、たくさんの人に出会い、たくさんの優しさに触れました。このような素晴らしい体験をすることができてよかったです。そして、またいつかインドネシアに行きたいです。

大好き♡インドネシア

加治木高等学校 2年 桜山 莉早

子どもたちの元気で明るい笑顔と村の大人の人たちの優しい笑顔が私はとても大好きです。今でも思い出の写真を眺めています。

私がインドネシアの人々と関わって感じたことは、インドネシアの人は笑顔で元気で愉快な人が多いということです。私がバスの中から手を振るとみんなが笑って返してくれました。村の子どもたちは、初め緊張していて距離があったけど、話しかけるとやっぱり笑顔で答えてくれました。仲良くなると、みんなが集まってきてくれて、言葉は伝わらなくても、腕を組んできてくれたり、とびついてきてくれたりと仲間に入れて一緒に遊んでくれました。

私のホストファミリーの人たちも明るく愉快な人が多かったです。家に着くとすぐに待っていた家族に囲まれて質問攻めでした。日本から持ってきた写真やパンフレットを見せると、いつも興味をもって聞いてくれました。インドネシアの人たちは、みんな勉強家です。ステイ中にいっぱい日本語を教えてあげました。村の子どもたちが『大きな栗の木の下で』を小さな子も大きな声で歌ってくれたのはとても嬉しかったです。私たちが練習していったインドネシアの曲を発表した時も、とても喜んでくれて、音楽を通して心が一つになれたのを感じました。

ホストファミリーのみなさんにはもちろん、家に遊びに来てくれた親せきの人たちや散歩中に出て仲良くなったおじちゃん、おいしいごちそうをたくさん作ってくださった村のお母さんたちみんなに「テレマカシー！（ありがとう！）」と伝えたいです。ほかにも伝えたかったことはいっぱいあります。でも、言葉がわからずに伝えることができませんでした。これか



本人：前列中央右

らインドネシア語を少しでも話せるようになって、伝えられなかったことを、みんなに伝えたいです。

そして、そのようなインドネシアの人たちの笑顔には日本人の人たちの活躍があることも知りました。現地で実際に活動している姿は本当に輝いていて、自分の活動に誇りをもって一生懸命に取り組んでいるのがよくわかりました。青年海外協力隊に興味は持っていたけど、知らないことの方が多くとても貴重な体験をすることができました。私は日本が他国に手をさしのべて、生活環境をよくしてあげるのではなく、他国の人たちが自分たち自身で生活を良いものにしていけるように技術を教えることが大切であることを学びました。日本の様々な技術が世界中でまた多くの人たちを助けているのは、とても嬉しいことです。現地で活動する人たちの言葉の中に、心に残ったものがあります。「ここよりも、もっと必要としている場所があるはず。」

私も共感しました。きっとそう思う人はいっぱいいます。しかし、思っても行動にうつすには勇気が必要です。その1歩を踏み出すと、現地の人たちの笑顔が待っています。それは1番の喜びだと話していました。「私たちの活動は魔法じゃない。」

実際、目の前にある壁はあまりにも多く難しいものばかりで驚かされました。現地の人たちの意見も聞き入れながら、協力し合いながらの活動でもあります。しかし、やはり人々の笑顔にかなうものはありません。苦労より喜びの方が大きいと話していました。

私はこの一週間で、貴重な体験をさせていただき、様々なことを感じ、新たな夢もできました。インドネシアの人たちのあたたかさ、青年海外協力隊の人たちの姿。私は、これから先、きっと忘れることはありません。みんなが笑顔で幸せを感じることができるような世界に近づける仕事、それが青年海外協力隊です。これからは、日本だけでなく、世界に目を向けていきたいと思います。

最後に、この事業を支えてくださったみなさんには、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



本人：中央

限りなき可能性を秘めた13名と共に

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長
 団長 弓場 秋信

「出発まで一週間を切っても団員からの問合せが無い。みんな不安は無いのだろうか」事務局担当者が呟いていた。8月1日出発の朝、鹿児島空港での団員一人一人の表情はいたって明るく派遣前訓練の時よりリラックスしている様に見える。結団式でのインドネシア語での挨拶そして抱負を語る団員、それを見守る不安げな家族。「成長した姿をお目にかけます」とインドネシアに向かった。

首都ジャカルタは、団員の期待を裏切った。想像していた開発途上国の姿、と目の前に現れた街の落差が団員を混乱に陥れている。一人当たりの国民総生産は、約2千ドルのインドネシア。3千ドル以下は開発途上国と呼ばれ、世界の3分の2の人々がそこに住んでいる。JICAインドネシア事務所やマカッサル事務所での説明で少しは理解が進んでいるが、数字と現実の姿とのギャップは解消しないままホームステイ先の南スラウェシ州ゴア県タナバンカ地区ビナバサ村に移動した。

州都マカッサルから村迄の約1時間30分、バスの中から見える沿道の家、道路、風景に変化が見え、開発途上国の実像が迫ってきた。村の集会所に到着すると、民族衣装を纏い、手には日の丸とインドネシア国旗を持って村人が歓迎してくれた。集会所でのお茶菓子を食べながらの村人による歓迎のダンス、そして対面式を終えいよいよ一人での4日間のホームステイ。

村での最初の夜、今回ホームステイ先探しをお願いした現地NGO「虹の会」よりの地図を頼りに団員の家を一軒一軒訪問した。生活環境・食事等の聞き取り、インドネシア語によるコミュニケーションの手助け、体調チェックそして受け入れ家庭への謝意を伝える事が目的である。既に一人になって数時間が経過した団員は訪問を待ちわびていた。水浴・トイレ・手で食べる食事作法等への戸惑いは感じつつも、事前研修での予備知識で乗り越えていた。しかし言葉が通じない苦しみを味わっている。自分が言いたい事を相手に伝えられないもどかしさ、相手の言っている意味が分から



本人：左

ない。笑顔、ジェスチャー、指さし会話帳等あらゆる手段を駆使し、家族の優しさに助けられながらの生活が始まった。

青年海外協力隊員の活動現場を3か所訪問し活動を体験した。有機肥料作りを指導しながら安全な野菜作りを目指している野菜隊員の伊東さん。中学生の時に、テレビでアフリカの医療事情を観て協力隊員を志し、現在南スラウェシ州の中でも貧困率の高いタカラル県で、衛生指導を学校や村落で行っている保健師隊員の田淵さん。生活苦のために満足に学校に通えない子供たちに、現金収入可能な商品作りに通常2年間の任期を延長して取り組んでいる青少年活動の熊倉さん。現地の実情に合った、現地の人々に必要な活動を地域の人々と共に取り組む姿は眩しく輝き、団員の視線を一身に集めていた。

ホームステイ期間中協力隊員の活動現場訪問や中学校での交流の他に、民泊先の家族と一日過ごした。人口約500人の村の主産業は稲作中心の農業、副業でレンガ造りが行われていた。福永さんはレンガ造りを手伝ったが、平均的な日当750円はもらえそうにない。脇君は刈り取った稲を、天日干し乾燥する事無く板に打ち付け脱穀する作業を手伝った。炎天下の労働は10分と持続しなかった。

2年前オーストラリアの援助で建設された全校生徒352名の地元中学校での交流。校舎玄関までの沿道を歓迎の列で埋めている学生の中を進み、伝統芸能による出迎えを受け校庭内特設会場に着席して交流会が始まった。鹿児島からは、インドネシアや日本の歌、空手、茶道、書道、折り紙、現地の人とも合流してのおはら節。一方インドネシアからは、歌、民族楽器演奏、民族舞踊の披露。至る所で学生同士の輪ができ、3時間を超す熱い交流が続いた。

言葉での意思疎通が難しいが故に、お互いが相手の表情・行動を観察し、その意図するところを理解する事で通じ合えたホストファミリーとの人間関係は非常に濃密であった。また異なる文化・生活習慣を受け入れ乗り越えた喜びと発見。新しい自分の住みかとは別れ難く、家族との再会を誓いながら涙で曇る村を後にした。

優しさで包んでくれた村人。インドネシアの人々の幸せを願い、共に汗を流す協力隊員。青少年の成長を応援する自治体・協賛企業。多くの人々から感動と刺激をもらい将来の進路や今やるべき事考える団員。今回の体験が将来大きく花開く事を夢見て。



本人：左

みんなの眼が輝いた

(財)鹿児島県国際交流協会
総務企画課長 松木 順治

朝、コーランを唱える声で目が覚める。時計を見ると午前5時。外はまだ暗い。インドネシア、スラウェシ島のマカッサル空港から約1時間半のところのところに位置する小さなピナバサ村のホームステイ先での初めての朝である。蚊帳の中には、私と10歳の男の子と二人でベッドに寝ていた。

鹿屋市にある鹿児島アジア太平洋農村研修センター(KAPIC)での1泊2日の事前研修を一緒に受けた中学・高校生13人が、8月1日から8日まで青少年国際協力体験事業としてインドネシアを訪問した。研修の時の団員は、期待と不安が交錯しているかなと思ったが、自ら応募して参加しただけあって、積極的でびっくりした。さあ、この子たちがどう変わるか、楽しみだ。

村に入った最初の対面式では、多くの村人が公民館の前に2つの国旗を手を大きく振って団員を迎えてくれた。歓迎セレモニーでは、子どもたちが民族衣装に着飾り、踊りが披露された。そして、ホストファミリーとの対面式。みんな笑顔で迎えてくれた。

村での最初の夕食は、土間に皆で座り、家族7人と一緒に輪になって食べた。主人が、箸やスプーンを使わずに右手だけで、こうだ、このようにするんだと、器用な手つき、指使いで食べて見せてくれた。「エナ、エナ」(おいしい)と言いながらナシゴレン(焼き飯)や焼き魚をいただくと、家族みんなの笑顔がこぼれた。

JICAマカッサル事務所では、インドネシアでの現状を聞いた。1日1ドル以下の生活という貧困率の高い地域が多いこと、環境汚染に無頓着な状況で、ゴミ処理や衛生面に大きな課題があるなど多くのことを学んだ。

青年海外協力隊の田淵隊員は、診療所で活躍していた。いかにしたら地域の保健衛生状況を改善できるの



か、2階の会議室でスクリーンに映る患者などの現状を見せながら患者のケアを行うボランティア体制確立に努めていることなどを団員に訴えかけた。田淵隊員の話に引き込まれ、さらに診療所の所長やスタッフからしっかりと信頼を得ている姿を見て、団員は何かを感じとったようだ。その後、地域の小学校に向き、歌に合わせて手洗いや歯磨きを児童に指導する田淵さん。授業に参加させていただいた児童へのお礼に団員みんなでインドネシア語の歌2曲を歌った。

熊倉隊員は、学校に行けなかった青年達に小学校の一教室で手芸による金銭収入を得る道を指導していた。学校に行きたくても行けない人がいっぱいいる状況を見て、恵まれた環境の日本との違いを感じたにちがいない。少しでも貢献しようと団員の多くが手作りのストラップをおみやげに買い込んだ。

1990年代から始まったというレンガ造り産業、ほぼ稲作の農業だけに頼っていたピナバサ村においては、現金収入を得られる重要な産業となっている。団員の一人福永さんが粘土を型箱に詰める作業に取り組み、一汗かいた。重労働にもかかわらず、1日500個作って日本円で750円程と聞き驚いていた。また、村人の話では、最近レンガを焼きたくても、燃やす木材がなかなか集まらないという。山林伐採による環境破壊が見えないところで進んでいるように感じた。

各団員のホームステイ先を夕食後の8時頃から団長ほか同行者で一軒一軒回った。



本人：右から3番目

いくつかの訪問先では、近所の親戚の方も歓迎に訪れているらしく、10人以上もいてたいへん賑やかだった。団員の中には、初めてのホームステイで緊張していたのか、団長の顔を見てホッと涙ぐむ人もいた。

8日間を一緒に過ごした13名の団員の打ち解けた雰囲気は、一体感を深めていた。多くの体験を胸に団員は、帰りの飛行機に乗り込んだ。皆、晴れ晴れと自信をつかんだような感じを受けた。これからが楽しみだ。彼ら彼女らの眼が輝いて見えた。

同行（通訳・健康管理）を終えて

青年海外協力隊インドネシア共和国OV
竹下 夏美

当事業に関して、過去5回マレーシアに同行をしており、今回で6回目。インドネシアは初めての体験である。次年度で20回目になるのだなとここまで継続している事業に対して、非常に感慨深い思いである。今回は、インドネシアでの国際協力体験およびホームステイを行うということで、光栄にも声をかけていただき、同行の機会を得た。

久しぶりのこの事業への参加、事前学習に今回は参加できなかったため、どうかな？と不安に思うこともあったが、その不安は彼らの笑顔を見て、すぐに吹き飛んだ。インチョン空港で合流した時、隊員の皆は制服を着て、インドネシアで披露する歌の合唱を練習していた。私も初めて聴く、訪問先の歌詞のAngin Mamiriやインドネシア語のBurung Kakak Tua、日本のふるさとやすきやきソングの4曲をとても澄んだ声で歌いあげていた。驚いたが、とても嬉しく思えた。この4曲は、ホームステイ先の村、中学校、国際協力の現場の数か所で歌われて、どこに行っても好評を得ていた。

過去に同行した中・高校生もとてもいい経験をし、その都度感動したが、今回の中・高校生もそれに勝って劣らず素直で、現地に溶け込み、とてもいい印象を与えていた。彼らは、臨機応変に対応し、順応性があり、協調性があった。たとえば、村の公民館で長時間にわたるスクールに見舞われた時、4・5歳くらいの村の子から高校生くらいまでの子どもたちと歌を交換し合い、お互いの遊びを一緒に長時間にわたり、楽しんでた。ボディランゲージとはよく言ったもので、言葉が通じなくとも「とうりゃんせ」や「だるまさんがころんだ」を一緒にやりながらルールを学び遊んでいた。歌も「幸せなら手をたたこう」や「蛙の歌」を



本人：前列右

お互いの言語で交換し歌い、後者は輪唱までやってのけた。子どもたちの順応性となんでも一緒に楽しむ精神には脱帽した。

ホームステイ先でもとても大事にされ、言葉が通じないなかでも頑張ってコミュニケーションをとる姿勢が見られた。お味噌汁を作ったり、浴衣の着付けをしたり、各自が工夫していた。また、それぞれの特技がいかされていた。空手や書道、お茶、ギター演奏他もとても喜ばれていた。彼らの芸達者に驚くとともにこの年齢でこの能力、今後も今回の体験事業をいかして、さまざまな経験を積んでいくとすれば、どんなにか有意義な人生を歩んでいくことだろう。是非、5年、10年、15年、20年後の彼らの姿を追ってみたい。また、これまでの隊員のその軌跡と現在の様子も知りたいと強く思った。

3年後、彼らは全員で今回の村に行くぞと宣言していた。3年後までに渡航費用を含む旅費をどうやって捻出するか、これから詳細な計画を立て、行動していきましょう。3年後が無理でも5年後でもいいので、是非、今回の誓いを実現してほしい。

「あなたたち皆に会えて、本当によかった。年は離れていてもいつまでもいい仲間の一人でありたいです。これからもどうぞよろしくお願いします。Terima Kasih kepada sahabat saya」

同行者の弓場秋信団長（弓場貿易）、松木順治さん（鹿児島県国際交流協会）、柳元理恵さん（協力隊OV）、本坊伊知子さん（南日本放送）、重吉亮祐さん（南日本新聞）、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。また、鹿児島県国際交流協会が準備から事後の対応まで全般に渡り、支えてくださった交流推進員の川崎涼子さん、JICAデスク鹿児島の力竹貴子さん他、関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

今後もこの事業が鹿児島県の青少年の育成に貢献し、継続して実施されていくことを願っております。

（記：2010年9月13日 オーストラリア、ブリスベンにて）



本人：右から2番目

Saya suka Indonesia! インドネシア同行を終えて

青年海外協力隊ドミニカ共和国OV
柳元 理恵

同行が決まった時、インドネシア未知の国へ行けるうれしさより不安が勝っていたことを覚えています。インドネシアで働いた経験のある友人には「で、どの島に行くの?」と聞かれ、インドネシアが数多くの島々からなることを改めて知ります。目前になり友人にメールすると、マカッサルは首都ジャカルタに住むインドネシア人も訪れたことのない場所だと言われ、どんな秘境に行くのかとも不安になりました。

到着して出迎えてくれたのは、日本語を話すインドネシアの学生たち。マカッサルには大学がありそこで日本語を学んでいるといいます。大きな町です。まずはひと安心。期間中ホームステイでも訪問先でもこの学生ニニさんオニルさんがたくさん助けてくれました。



本人：右から2番目

ビナバサ村でのホームステイ。手作りの国旗でたくさんの村人が出迎えてくれました。

まずそれぞれが家に行き夕食をいただきます。サヤマウマカン、ご飯を食べたいとどうにか伝わりました。着いてすぐの家庭訪問は夜8時に開始し、11時最後に着いた村上君はもう就寝後でした。村での1日目、色々な初めての出来事に遭遇、そして手動水シャワーも皆経験し、手で食べる夕食も体感。改めて書きとめなくともそのすべてが、初めてのことで、全員が様々な体験ができました。たくさんのエピソードがあります。

私も1人でホームステイ。体験事業の一員でした。食べる、寝る、トイレに行く、シャワーを浴びる。日

本で考えずに行えることをどうにか伝えて実施できました。日本人は珍しいため家にはたくさんの人々が訪れました。古い日本製のテレビが映っていましたが、娯楽は少ないと思われ、折り紙を始めると16～17歳の男子も折り紙に夢中になっていたことが印象的でした。クーラーもないので、夕涼みで屋外に腰掛けて過ごす、そんな村の過ごしかたに溶け込んでいた団員も見ました。

3人の協力隊活動現場を視察、生の活動を見て多くのことを団員が吸収していました。興味関心はどんどん膨らみ、活発な質問もできとても有意義な時間だったと振り返ります。

13名の中高生の変化・成長をすぐ傍らで見守り、そして感動をもらった夏でした。何より誰一人団員が病に倒れることもなく帰国でき本当に良かったです。インドネシア人の温かさ、ホスピタリティを深く体感し、強い印象を受けて帰国した団員が、「今できることはなんだろう。」と模索していました。今できること、伝えること、記憶し忘れないことと同時に受け感じたインドネシアの人々の温かさを、自分自身が周りの人々に対してこの鹿児島で再現することではないかと私は考えます。同行者の私もインドネシアファンになりました。貴重な経験をする機会を与えてくださった実行委員会、団員13名プラス5名の同行者に深く感謝いたします。テリマッカシー。



本人：左中央

インドネシアの夏

南日本新聞社編集局社会部 記者

重吉 亮佑

「インドネシアに行ってみるか」。そう上司に言われたとき、うれしさとともに、「インドネシアってどんな国だっけ」と考えた。東南アジアの国というのは分かっているが、具体的なイメージが出てこない。そんな国で、最高の思い出ができるなんて、思ってもみなかった。

“大都会” ジャカルタで過ごしたあとに訪れたホームステイ先のタナバンカにあるピナバサ村。格差を感じた生徒も多かったはず。家に浴槽はなく、狭い空間で体を洗う。お湯なんてものもなく、体を流すのはトイレを流すのと同じ冷たい水。

村を訪れた当初、ある生徒は「どうやったら格差って無くなるんですかね」と話しかけてきた。素直な感想だと思った。アスファルトで整備されているのはメイン道路だけ。食事でも決して満足なものとは言えなかった。

そして、生徒たちは言葉の壁にもぶち当たっていた。自己紹介程度は学んできたが、言っている言葉の意味が分からない。初日の夜、家を訪問すると涙をこぼした生徒もいた。「大丈夫かな」との心配をよそに、村で2日目になると、生徒たちは指さし会話帳やジェスチャーですっかりとけ込んでいた。冗談を言い合ったり、バイクで目的地まで連れて行ってもらったりしながら遊んでいた。

そこには村人の貧しいながらも豊かな優しさがあった。別の生徒は、晩ご飯のナシゴレンがおいしくて、家族に勧められておかわり。その後、母親が自分の分



本人：中央

を喜んで食べる生徒のために差し出してくれていたのだと知った。代わりに食べるものがあるほど裕福な家庭ではない。その生徒は別れの際に、ホストファミリーに寄り添い泣きじゃくった。

青年海外協力隊の活動現場視察も、生徒たちにとって学ぶところが多かったに違いない。腫瘍でおなかが増れ上がり、手遅れになるまで病院に行けない村人。学校までのバス代が払えないため、働きに出る子どもたち。学校はあるのに、行っても先生が来なかったりする現状があった。

「学校や病院に行くなど日本では空気のように当たり前のことが、インドネシアでは違うというのが衝撃的だった」と話した生徒は、「多くの子どもを救いたい」と将来小児科医になるという夢への思いを強めていた。

別れるとき。村での生活を振り返り、みんなが泣いた。初日に心細くて涙を流した生徒も、「帰りたくない」と再び泣いた。その涙は成長した証だったに違いない。

遠く離れたインドネシアで、貧困という現実と豊かな優しさに触れた生徒たち。何にも代え難い経験は、将来必ず生きてくるものに違いない。無限の可能性を秘めた十代のこの時期に素晴らしい経験をした生徒たち。自分も経験していれば。そう考えると、生徒たちがうらやましくて、嫉妬に似た感覚を覚えてしまった。



本人：後列右から3番目

同行取材を終えて

MBC南日本放送報道局報道部 記者
本坊伊知子

インドネシアへの海外取材！最初、聞いた瞬間からワクワクしました。しかし、よくよく聞いてみると「スラウェシ島？マカッサル？ん～、聞いたことがない…。」いったいどんな所なのか、インドネシア語って？治安は？生活水準は？…と出発前の私の頭は「？」でいっぱいでした。

取材用の機材の準備はしたものの、ろくに語学の勉強もせずに迎えた出発当日。「きっと子供達も不安なんだろうな…」という私の心配はあっという間に吹き消されました。まず、なんといっても子供達同士がすっかり仲良し、一致団結。さらには「現地の人達と仲良くなりたい！」「青年海外協力隊の活動をしっかり見て来たい」と目を輝かせる姿に、私も旅が一気に楽しみにになりました。

そして、いざインドネシアへ。子供達の順応力はすごいなと感じました。空港で、ホテルで、すぐさま現地の人々とコミュニケーションを始めました。また、JICAの事務所や青年海外協力隊員の活動現場でも積極的に質問し、現地のスタッフからも「今回の生徒さん達は本当に熱心で驚いています」と言われていました。また、現地での歓迎セレモニーの出し物では、書道にお茶にと、それまでニコニコしていた子供達の目はうって変わって真剣そのものに。日本の伝統を伝えるという意気込みで満ちていました。そんな子供達と同行できたことを私も誇らしく思いながら撮影していました。

そんな中、私個人の最大の心配事はホームステイでした。なんと今回は同行者もそれぞれホームステイだ



と言うじゃありませんか。「やっぱりインドネシア語もっと勉強してくればよかったな…でも、私は同行取材が目的であって、そこまで気にすることはないだろう。」実際、取材のため朝から晩までほとんど外にいた私でしたが、どんな時でも笑顔で迎えてくれたホストファミリーの優しさに、お別れ会、そして別れの日と、子供達の頑張った姿に感動したのに加え、私自身もホストファミリーとの別れがつかなくてつかなくて、うっかり号泣してしまいました。同行者の私まで貴重な経験をさせて頂いたことに感謝しています。短い時間でも、かけがえのない存在となったホストファミリー。子供達は私以上に別れがつかかったことと思います。

また、私が取材をしている際に、荷物を持ってくれたり、インタビューの手伝いを進んでやってくれたり、子供達の優しさもすごうれしかったです。インドネシアの人が目が合うとにっこり微笑んでくれることや村全体で温かく私達を迎え入れてくれたことに日本では薄れてきた優しさを感じましたが、日本にも心優しい子供達はまだまだいるんだとうれしくなりました。この子供達が今回の経験をどう活かしていくのか本当に楽しみです。

3年後、再びインドネシアに“帰る”と話していた子供達。一回りも二回りも大きくなって帰る姿を私も一緒に見れたらと夢にみえています。



本人：中央

再び故郷，マレーシアへ！

第15回（平成18年度）マレーシア派遣団員 北園 優歩

「また絶対に帰ってくるからねー！」

泣きながらそう言い残してマレーシアの家族と別れた4年前、私はまだ高校1年だった。だが、「家族」との思い出はとても感動的で今もなお脳裏に鮮明に残っている。

私の第二の故郷はマレーシアのサバ州、標高4095.2メートルという雄大なキナバル山のふもとにあるシニシアンという農村である。村に住むのは原住民のデュソン族で、民族衣装や音楽、ダンスには独特な雰囲気がある。

この夏、両親の友人がマレーシアに住んでいることがきっかけで再び行けるチャンスができた。鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会の会長を務めていらっしゃる弓場さんのマレーシアに住む友人の方にお世話になりながら、村に二泊三日滞在した。

この4年間でサバ州を訪れる観光客が増えたために4年前の景色とは少し変わっていた。村までの長い山道の途中には新たなリゾート地やショッピング施設の開発が進められており、村も宿泊施設を増やし、きれいなトイレやシャワーをつけていた。また、村のみんなが英語をはなせるようになっており、観光業に積極的になっていた。

村に着くと、車の音を聞いたお母さんがすぐに家から出てきた。お母さんは「泣け泣け」と抱きしめながら大歓迎。その日は私を知っている親戚、友人みんなを呼んで晩ご飯を食べた。晩ご飯が特に盛大になったのは、ちょうどイスラム教の断食明けだったのである。みんなもりもり食べ、食後にはドリアンのデザートまですすめられた。ドリアンには4年前に食べた時のまずい思い出があったが、再び食べてみるととても美味しかった。その事を家族に伝え、その日から私はドリアン係になってしまった。みんな相変わらず元気で明るく、話は夜中まで続き、盛り上がるにつれてみんなの英語はだんだんとマレー語混じりになってきた。それでもみんなで大笑いしあった。

次の日の朝食は朝の4時。断食のためであるが、慣れない私にはとてもきつく、昨夜のようにもりもり食べる家族を見て驚いた。今日の予定を聞くとマッサージに連れて行ってくれると言う。ウキウキしていたが、連れて行かれたのは近くの川。一瞬目を疑ったが、川の浅瀬の一部には鯉くらいの大サイズの灰色の魚が大量におり、そこだけ真黒になっていた。一体なにをするのかと思えば、その大量の魚の中に餌を握った私の手を突っ込ませようとしたのだ！歯のない魚は一斉に手に吸い付いてきて、私は悲鳴をあげた。これがこの辺のマッサージなのだという。

このように日本にない文化をたくさん体験することになった一方で、グローバル化や観光化の波は私のふるさとも容赦なく押し寄せていた。パソコンで連絡を簡単に取り合えるかわら、その便利さをいいことだと言い切ってしまう現地の人に対して浮かんだ言いようのない私の気持ちは何だったのだろう。

帰国の日、村長から「これを日本で配って」と渡されたホームステイのパンフレットの1ページには、4年前の私がVサインで写っていた。



本人：右

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

(財)鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績はP41参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

回	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)~4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祁答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スブランペラ)	平成4年 3/27(金)~4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)~7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)~8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)~8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 穎娃町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン, パリットムントリー)	平成9年 7/27(日)~8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村 推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)~8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 始良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村 推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)~8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村 推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンボン)	平成12年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 未吉町, 串良町	市町村 推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)~7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 溝辺町	市町村 推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)~8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村 推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県を 予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフルエ ンザの影響により中止			市町村推薦 予定
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレンガヌ州)	平成16年 7/19(月)~7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村)	平成17年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市国際 交流協会, 国分市国際交流協会, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州)	平成18年 7/22(土)~7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第16回	ベトナム (ハノイ, バクザン省 バクニン省)	平成19年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 枕崎市教育委員会, いちき串木 野市, 霧島市教育委員会, 南さつま国際交 流推進協議会, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県 ボンミー村)	平成20年 7/20(日)~7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市国際交流協会, 霧島市国際交流 協会, 南さつま国際交流推進協議会, 南九州市教 育委員会, 枕崎市教育委員会, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県 ナーソン村)	平成21年 7/19(日)~7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市国際交流協会, いちき串木野市国 際交流協会, 南九州市教育委員会, 南さつま国際交 流推進協議会, 枕崎市教育委員会, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦



またいつか必ず会おうね…



= 編集・発行 =

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816

鹿児島県鹿児島市山下町14-50 かごしま県民交流センター1階

(財)鹿児島県国際交流協会内 担当：力竹 貴子、川崎 涼子

TEL：099-221-6620 FAX：099-221-6643

絵・吹き出し：奈良迫 ひかる(鹿児島県立松陽高等学校3年)

